

れた内容も模倣の域を出ないものだという観点から、漢文による著作に対する評価に留保をつけている。

フィン・トゥク・カンは、歴史を溯って中国に対するベトナムの固有性を想定したうえで、その固有性と中国からの影響とが重なり合うものとしてベトナムの伝統を把握し、その中から何を継承すべきかという議論をしている。これに対し、ファム・クインは、伝統的要素のなかに継承すべきものがあると考える一方で、ベトナムの伝統文化が中国の模倣を主とするものであったと把握し、確固たるベトナムの独自性は過去には存在しなかったととらえている。

北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼とその社会的背景

——ナーンへの移住史とのかかわりで—— 馬場雄司

タイ北部に居住するタイ・ルー族は、雲南に形成されたシブソーンパンナー王国を出自とする。ナーン県ターワンパー郡のN, D, T村は、19世紀、内乱によってシブソーンパンナーのムアンラーから移住し、ナーン土候のもとに入植したことを起源とする。三村は、三年に一度、ムアンラーからの移住を記念し、守護霊チャオルアンムアンラーを合祀する。儀礼は三日間にわたってN村で行われ、D村に住むムアンラーの土候の子孫チャオムアンとN村に住む司祭（モームアン）が中心となり、水牛等が供儀される。今日、この儀礼はN村主導のもと外部を意識して肥大化し、観光局も注目している。現在、儀礼を主催とするN村は農村開発の模範村である。一方D村は貧しく、かつてのチャオムアンが村人を殺害した業が貧困をもたらしたといわれる。ここに、D村と、N村の間の儀礼をめぐる「心理的」葛藤がある。二村の間には、日常の社会関係におけるコンフリクトはほとんどない。ところが、D村の貧困の説明となるチャオムアンは、儀礼における最も重要な役職であり、D村は儀礼に参加せざるを得ない。従って、N村中心の儀礼の肥大化に拍車がかかることで、「心理的」葛藤が強まるのである。タイ・ルーのターワンパー盆地入植に関する歴史に関しても、D村では入植時よりチャオムアンはD村にいたとするが、N村ではN村から他の二村が分村したとする。地理環境や伝承を考慮すると、D村の入植が先と考えられるが、このN村中心の歴史解釈は、N村を中心としたタイ・ルーの「伝統」の創造と関わっている。この儀礼は故地ムアンラーではムアンラー土候の権威維持を目的としたが、タイ国移住後の今日、ムアンラー土候の子孫は儀礼上の役割のみ果たし政治的権威はない。タイという「国民国家」における農村開発競争という文脈で、ある村が他村に対する優位を確認させるという新たな権威が、この儀礼に関わっているようである。

即位式と沐浴と龍

——東南アジアの伝統文化と外来文化—— 山本達郡

東南アジアはインド・中国・イスラム・西洋の各種の文化を受容しながら、古くか